関西自然保護機構会誌 *23*（2）：*207－210, 2001*

春日山植物観察会記録

奈良植物研究会　森　本　範　正

Plant watching excursion at Kasugayama forest. Norimasa Morimoto (*Botanical Society Nara*)

9月9日午前10時定刻，大仏前に集合。総員60余名，私の予想よりかなり多かった。県立自然博物館をつくる会事務局の西田史朗先生挨拶の後，私がコースなどについて説明する。春日山周遊路を北側から一周するコースである。集合場所の周囲には，立派に育ったナンキンハゼがたくさんある。秋には美しく紅葉するのだが，今やこの木は春日山原始林にとって大きな脅威となっている。

大仏前～若草山頂

歩きだして間もなく新公会堂の前に出る。ここに小さな池があり，ヒメビシが生えている。春日山には直接関係ないが，このヒシは絶滅危惧植物であり，この池は奈良県内で確認されている自生地2つのうちの1つであることを話す。道路わきにはイチイガシやシラカシが植えられており，これらは春日山照葉樹林に多いカシ類であるので，手にとって見てもらい両者の違いを説明する。

若草山への分岐点付近の道端に大きなムクロジの木があった。これは前日の講演会において，奈良教育大学の松井淳先生が写真で紹介された木であり，そのとき話された複葉について復習する。またこの木は日当たりのよい所を好む陽樹であり，春日山ではカラスザンショウなどとともに，台風の後に生じたギャップによく生えてくるものである。道路に沿って小川があり，そのむこうはもう鬱蒼とした森林で，大きなフジのつるがからまり深山の趣がある。市街地のすぐそばでありながら，このような場所のあるところが春日山のすごいところである。月日亭を過ぎるあたりから時々モミの巨樹が現れる。標高は100 mをわずかに上回ったくらいであるが，このような低いところにモミがあるのも珍しい。長い間保護されて撹乱が少なかったためであろうか。

春日山周遊路では，このあたりから若草山頂までがシカの影響の顕著な部分である。シカの好まないナギ，イヌガシ，アセビが異常に多く，イラクサ，レモンエゴマ，イワヒメワラビも目立つ。一方，シカの好むアオキはこの日この部分ではまったく見ることができず，ヤブツバキはわずか1本見ただけである。アラカシはある程度見られるが，付近の他の山に比べればかなり少ない。ナギは下の方に多く，上に行くほど少なくなるが，これは上の方ほどシカの影響が少ないというより，菅沼孝之先生の台風による種子散布説によっても，上方に広がるには時間がかかるということであろう。それでも上の方にないということではなく，中腹あたりでも時に散見され，上方の鎌研交番所に近づいたあたりでも道端にかなり大きな木があった。

途中にはコジイの立派な林がある。ウラジロガシ，シラカシ，ツクバネガシなどのカシ類も多く，下方に多いといわれるイチイガシは，けっこう上方にまで分布している。さすが世界遺産に指定された照葉樹林だけのことはあると思うのだが，気になるのは後継樹がほとんど育っていないことだ。

関西自然保護機構業績　第303号

むろんシカに食われるためであろう。低木層に多いのは，シカに忌避されるアセビ，イヌガシ，シキミなどであるが，不審に思うのはサカキが多いことである。ツバキ科のサカキをシカが食わないはずはないと思って，前に試してみたことがある。するとけっこう食うのである。サカキの生産量は，シカによる消費量を上回っているのだろうか。

3年前の台風でできたギャップがところどころにある。倒れた木の幹や枝が地表を覆っているため，イワヒメワラビなどシカの食わないシダが少し生えているくらいで，まだ新しい樹木の育っている所は少ない。しかし，道路わきなどにできた土壌の露出しているギャップでは，10〜30 cmくらいの若木の生えているところがある。そのような場所で多く見られるのはナンキンハゼで，わずかにカラスザンショウが混じっている。将来の春日山の変貌をかいま見たような思いがする。

珍しいものとしては，ウドカズラがあった。若い葉は赤くて，逆光に美しく映えていた。ギャップの辺縁でサカキにからみついたものは，日当たりがよく，たくさんの実をつけていた。暖地性のもので，南紀ではときたま見かけるが，奈良県では春日山以外で見たことがない。大台ヶ原の記録があるけれどもこれは信じがたい。和歌山県でも少ないようで，最近発行された『和歌山県レッドデータブック』に絶滅危惧植物としてとりあげられている。

若草山の山頂に出る。ここは春日山原始林を外側から見るのに適した場所だ。樹冠が入道雲のような照葉樹林の中に，スギやモミなど針葉樹が尖って突き出している。ここからは，御蓋山へのナギ林の侵入状況を見てもらおうと思ったが，あいにくの曇り空でわかりにくかった。晴れておれば，ナギ林が他の樹木の部分より青っぽく見えるので，その様子がよくわかるのだが，残念であった。

ここで昼食。若草山にはワラビが多い。シダ植物を食う哺乳類は少ないそうだが，シカも食わぬものを我々は食っている。人間は稀にみる食性の広い哺乳動物なのだろう。コガンピもシカに嫌われるのか，若草山にはたくさんある。この植物の生える山地の草原が少なくなり，奈良県内ではあまり見かけることのないものだが，山焼きとシカのおかげで，ここにはふんだんにある。

若草山頂〜首切り地蔵

コースのこの部分は奈良奥山ドライブウエイの一部に当たり，標高350 m前後，起伏の少ない自動車道で，春日山原始林北面から東面を迂回している。このあたりへ来ると今までとは少し様子が変わり，コジイの若木が散見されるようになる。ヤブツバキもときに姿を見せる。ということは，コースの最初の部分にくらべれば，シカの影響がやや少ないということだろう。原始林的な部分もあるが，スギ・ヒノキの人工林もある。最初のコースではあまり見なかったホソバタブがだんだん多くなる。

ここで変な植物に出会った。マンサクである。道端にただ1本，2 mあまりの木が立っている。このあたりで今までマンサクを見たことはなかった。標高も350 mくらいでマンサクの自生地としては低すぎる。そこで参加者の皆さんに，これは自生にしては変だ。植えたものかもしれない，というような話をした。しばらく歩いた後で，近畿植物同好会会長の平野弘二氏より，あれはシナマンサクだったと知らされた。それなら植栽にきまっている。シナマンサクと見抜けなかった自らの非力もさることながら，春日山のような自然度の高い場所に，こんなものが植えられていることに腹立たしい思いがする。原始林とはいいながら，春日山にはかなり多くの樹木が植えられている。コースにたくさん見られるイロハモミジやオオモミジはほとんど植栽とみられる。若草山頂に近い

駐車場付近にはサンゴジュが植えられている。私は以前から記録のあるヤマモモやコブシにも，疑問を感じている。原始林というからにはできるだけ人為は避けたいものである。

芳山交番所で，ドライブウエイから分かれて新池の方へ下る。ここでアオキを見た。この日の全コースで見た，唯一のアオキであった。間もなく首切り地蔵の前に到着。ここで10分ほど休憩。

首切り地蔵～春日大社

コースは上側の旧ドライブウエイと下側の柳生街道の2つに分かれているが，下側を選ぶ。この道は滝坂の道ともよばれ，昔柳生方面に通ずる街道であったとかで，ところどころ石畳が残っている。ホソバタブやアブラチャンが多く見られる。この日のコースの中では最もシカの影響が少ないと思われる部分で，ヤブツバキかかなりある。ところどころにカラスザンショウやムクロジがかたまって生えているところがあり，参加者に，これらは昔できたギャップに生えたものであろうというような話をする。40年ほど前の第二室戸台風で，春日山の木はたくさん倒れた。ことによったらそのときのギャップに生えたものかもしれない。

妙見宮への道の分岐点付近の道端に，小さな白い花をつけ始めた常緑樹があった。シロバイである。この木は奈良県南部では照葉樹林内でときに見ることはあるが，少ないものである。柳生街道のこのあたりには比較的多く，県内ではもっともよい観察場所である。これから能登川に沿って下るとアラカシの多い二次林となる。しかし川をへだてた北側の斜面は原生林で，カギカズラのからまったところがあった。しかし川のむこうであるため，見にくいのが残念であった。

やがて川に沿った住宅地に出る。道路北側に空き地があり，川をへだてたすぐむこうは春日山の山麓で，原生林の外面をすぐ近くから見るのに適している。コジイやイチイガシが多く，モミの大木もある。

飛鳥中学校の前で北に曲がり，春日大社南側の自動車道に出る。ここに旧ドライブウエイの南側入り口がある。この付近の道路のすぐ上の部分にナンキンハゼが密集して生えていた。おそらく道路工事でできた裸地に侵入したものであろう。このすぐ東に春日山の将来を予告するような重要な場所があるので，旧ドライブウエイを50mほど東に向かって入ってもらう。道路北側の斜面は春日大社の境内地で御蓋山の麓にあたりイチイガシやコジイ，シデ類などの茂る林であるが，その林床を見るとギョッとする。上層を占める高木の後継樹はなく，1～2mくらいのナギの幼樹ばかりがひしめいている。100年200年後，上層の高木が枯れたとき，この林がどのようなものに変るのか誰の目にも明らかである。

西の自動車道に引き返し，春日大社の境内林に入る。アセビが圧倒的に多く，イヌガシも目につく。道端にはイズセンリョウが生えている。どれもこれもみなシカの食い残し植物である。シカにかじられそうな木は幹に金網が巻かれ，保護されている。イチイガシの巨樹に出会う。この木が小さかったころはシカが少なかったのだろうか。現在では特別の保護がない限り，イチイガシの幼樹がこのような巨木に成長できるチャンスはまずないだろう。

しばらく進むと林相は変わり，ほとんどナギばかりとなる。今までナギを悪者のように書いてきたが，これはこれで見事である。ほとんど純林といってよく，このような立派な群落は他では見られない。壮齢樹の立ち並んだ群落の下は，密集したナギの幼樹が出番を待っている。そのため地表面は暗く，他の樹種は侵入しにくい状況にあるが，たとえ侵入してもシカが待ち受けている。親木が倒れ，ギャップができたらたちまちその下の幼樹

が成長を始めるだろう。こうしてナギの群落はシカによる選択とアレロパシーによって，いつまでも維持されそうである。

間もなく春日大社の参道に出た。この場所で午後３時半ごろ解散となった。

今回この観察会の講師を引き受け，春日山の植物相を主としてシカとの関連において説明した。多くの参加者があり何よりであったが，反面，私の説明が十分に聞き取れない方もあったと思われ，申し訳なく思っている。しかし参加者の方々は熱心に聞いてくださり，西田先生をはじめ皆様方のご協力により，無事終ったことを感謝している。